



TITLE:

<トピックス>蛙の独り言

AUTHOR(S):

藤原, 清司

CITATION:

藤原, 清司. <トピックス>蛙の独り言. 技術室報告 2010, 11: 37-42

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233420>

RIGHT:

蛙の独り言

藤原清司

私の隣の席におわします西村君に「藤原さん、技術室報告の締め切り今週の金曜日ですよ！」と言われて、おおいに慌てた。先から気にはなっていたくせに生来の意気地なしで、締切日確かめるのをぐずぐずと先延ばしにしていました。何しろ人間ドックの検査結果を知らせる封筒を開けずにそのままにして、見るのが怖いと言って一年以上もほったらかしにするような人間です。それに私なんぞは、要請されている10ページもの紙幅を埋めるための話のタネを、どこを探しても見つけようがありません。ただただ勤務年数が長いだけの落ちこぼれ技術職員であります。

そんな訳で、この文は2002年度の技術室報告に、私が勤めている宇治川オープンラボラトリー（宇治川水理実験所）の創立50周年を記念してOBの皆さまにも寄稿をお願いして掲載した『宇治川水理実験所の思い出ー 実験所の50周年と本館とのお別れを記念してー』に載せた私の『未来へ』という文を下敷きにして、それに新たに文を混ぜてふくらませたものです。

大学受験に失敗した後、身の振り方を成り行きまかせにしていた私は、昭和43年4月に京都大学から来た面接の通知を渡りに舟とばかりに合法的な家出のパスポートにして、鄙びた若狭の村から京都に出て来ました。本当は京都に来るよりも東京に行きたかったのですが、高校の担任に都庁の就職試験の受験を申し出たところ願書の締め切りがすでに終わっていると知らされて、結果としてやむなく京都に出てきました。東京には小さい頃（小学生？）に左幸子さん主演の「女中っ子」という映画を観てから何となく憧れていたのです。高校を卒業したら家を出ることも、自分の中では決まっていることでした。じめじめとうす暗い北陸の寒村から、明るくて広い世界に都会に出て行きたかったのです。母が急死したときにはじめてそのことを後悔しましたが、あのまま田舎で百姓暮らしをしていても結局は都会へ出て行ったに違いないと思います。

京都に出てきた最初の2年間ほどは、近鉄小倉駅近くに住んでおられた同郷の人の家に下宿していました。建売長屋の一軒で、どちらを向いても同じような家がひしめき合って建ち並ぶ様子に、田舎育ちの私は最初の頃、すごく閉塞感に襲われたものです。また、同じようなことに最初の頃は電車に乗ると、周りの人々が私をじろじろと見ているような錯覚に襲われて、少し気味が悪い思いをしたのを憶えています。

その頃の伏見の大手筋界限は、日曜ともなると人でごった返し、京阪電鉄伏見桃山駅辺りから西の方を見ると通りいっぱいの人で埋まり、身動きが出来ないくらいにたいそう賑わっていました。今は携帯電話屋やチェーン店などが増えて、実験所とも縁の深かった文房具の園城や金物屋のみずたになどのいわゆる老舗が少なくなり、人影もまばらになって少し寂しい思いをしているのは私だけでしょうか。それでも、街の中を水が流れ、こんもりとした森があり、いまだに繁華街を少し離れると鄙びた所がある伏見桃山の街が大好きです。家を建てる時に伏見桃山の街周辺にこだわったのですが、結局予算との関係でかなわなくてくやしい思いをしました。

小倉とその後の近鉄大久保駅西方の府営西大久保団地に妹たちと住んでいた頃は、実験所の帰りに近鉄の桃山御陵前駅までよく歩いたものです。実験所から東高瀬川に架かる細い人道橋を渡って宇治川の堤防の上を歩いて、ときどきはニョロニョロにご挨拶しながら三栖の閘門の横を通って今の港公園の中を京阪電鉄中書島駅まで出て、中書島の駅前通りを歩いて筋違いから納屋町を抜けて大手筋に出るコース



実験所前の宇治川の葭原

です。ぶらぶら歩いて路上観察しながらいつも何かを考えていました。何を考えていたのでしょうか、今となっては思い出せません。納屋町にはなじみの喫茶店があって、週末にはいつも友人とダベリングをしていました。

中書島の駅前通りをドンと突き当たって少し左に行ったところに「光ちゃん」という飲み屋があり、成人前から先輩によく連れて行ってもらいました。その頃のなじみの店といえば他に味噌だれ餃子の美味しい店、姉弟でやっていたスナック「扇」、この店の弟の方が、私が痔で入院したときにガラスの器を持ってわざわざ見舞いに来てくれたのは懐かしい思い出です。それと外せないのが駅前通りを駅から少し下がったところに晩になると出ていた屋台の中華そば屋です。特に冬の寒い晩の飲み屋の帰りに、少し細めの堅麺でかんすいのよく利いた鶏がらスープの一杯の中華そばの美味しかったことは今でも忘れません。私は今でもこれまで食べた中華そばの中では、あれが一番美味しかったと思っています。それらはみんな、今はなくなってしまいました。

最近少し変化の兆しのある中書島駅前通りですが、長らく鄙びたままをそのままに残していました。その名のとおりの宇治川とその派流に囲まれた島状の中書島は、大石内蔵助の遊蕩で有名な墨染の撞木町の後塵を拝して戦後の暫く後まで廓の街でした。深作欣二監督の「仁義なき戦い」シリーズのロケをここでやっていたということをずっと後になってから聞きましたが、つい最近までなるほどそんなようなレトロで艶めかしい雰囲気満ちてい



現在の中書島駅前通り

ました。外環状線ができる前、港公園の無い頃、京阪電車の中書島駅で降りて今の港公園の

中を通り宇治川の堤防に出て実験所まで歩いて通っていました。その頃の記憶は定かではありませんが、宇治川の堤防沿いに民家や幕末の頃のものだと噂される御墓などがあり、草原の中を歩いていたように思います。三栖の閘門の周辺は、今ではきれいに整備されて十石舟の宇治川派流巡りの舟着き場などがあり、休日には観光客で賑っています。デートコースにもお勧めです。

実験所との最初の出会いで今でも憶えているのは、宇治川水理実験所に就職が決まり、その当時庶務掛長だった松村一範さんと一緒に、吉田にあった防災研究所の赤レンガの事務室から連絡車に乗せてもらい、防災研究所の所長をされていた矢野勝正先生にご挨拶に伺ったことです。南側と東側に大きな窓が開いた実験所本館二階角の研究室で、でっぴりと太って貫禄と凄みのある、土方の親方と言っているような風格の先生にお会いしました。その日から今日まで、42年間の職業生活をずっと離れることなく宇治川オープンラボラトリー（宇治川水理実験所）で過ごしたことになります。

私が勤め始めた昭和43年当時は、昭和45年春に防災研究所が宇治構内に統合されるまで、実験所に防災研究所の土木系を中心とした多くの研究室が集まっており、教職員、院生等を合わせて約120名の人が働き学んでいました。その中で我々技術職員（技官）も、20名近くの仲間が働いていました。矢野先生など少数の教授を除き、みんなとても若くて平均年齢は20歳代だったのではないのでしょうか。そのため、実験所全体がはつらつと活気に満ちていました。職員の親睦を図るための親睦会があり、春の歓送迎会、夏の海水浴、秋の運動会などの楽しい催しを活発に行っていました。それは、教授、助教授、助手、行政職員、日々雇用職員、学生が分け隔てなく共に憩う、今をもって語られる実験所の一つのユートピア時代を成すものだったのでしょう。私は、再びそのような時代が到来せんことを願っています。

その頃の実験所構内は、屋外に多くの実験施設があり、また、両方とも今は取り壊されてすでにない本館と、私がオペレーターとして入職のきっかけになった河川災害総合基礎実験施設に研究室がありました。構内の西端の方は荒地で草がぼうぼうと生え、野ウサギやタヌキ、キツネなどの棲みかとなっていました。ときどき野ウサギが駆けっこをしているのを見たのは田舎ではなくて実験所でした。昭和45年春の統合の後には、実験所はほ



昭和43年頃の東門と旧本館

ば専任の教職員だけになってしまい、急に活気がなくなつたように感じました。それは突然 120 名から 10 名ほどの所帯になったのですから当然といえば当然です。

勤め始めて最初の頃の思い出の一つは、私は最初、本館の南西角にあった図書室に連なった実験所の事務室に机をもらったのですが、勤めだしてから暫く経った初夏の頃、事務室の先輩方に、私の歓迎会をかねて京都北山の貴船に暑気払いに連れて行ってもらったことです。出町柳から、青葉が薫る初夏の汗ばむ中を狭い谷間に沿ってガタゴトと初めて叡電に乗り、貴船川の涼しい風が吹き渡る床の上で冷たいビールを飲んだことが、今でも鮮やかな印象となつて残っています。また、最初の頃、生真面目に始業時刻の 8 時 30 分前には出勤して先輩たちの机の上を拭くなどしていましたが、あるとき一人の先輩からそんなに早く来なくても 9 時頃に来たらええんやでと言われたことがあります。良くも悪くも昔は昨今と違い何かにつけのんびりとしていた。そのような時代を懐かしく思います。

私が最初にかかわった河川災害総合基礎実験施設は、現在の第 1 実験棟くらいの大きさがあり、三つの領域に分かれた降雨部と長くて幅の広いコンクリート水路の河道部とから成り最大 140kW の揚水ポンプが鎮座していました。そのポンプたちの軸受けのパッキンを交換するのが一仕事でした。古いパッキンを抜き出して、代わりに新しい綿糸に銀色の粉をまぶした四角い断面の紐状のパッキンを軸の円周の長さに合わせて切り取り、軸に巻きつけて軸受けの奥の方に押し込む、いわばたたそれだけのことだが骨が折れました。もっとも骨が折れたのは私ではなくて、実際に仕事をしてもらった昔は関電の発電機などの修理工をしていたという実験所の構内整備をやっていた西村晃さんでした。その西村さんには他にも色々と助けていただきました。また当時の実験用水を溜めるための低水槽には蓋がなく、風に吹かれて飛んで来たほこりやゴミが沈んでヘドロとなつて底に溜まり、それに鮎などが湧くのでときどき水をかい出して清掃する必要がありました。今、鮎などが湧くと書きましたがきれいに掃除しても次のときには必ず鮎がいるのです。実験用水は循環させて使っていて水系は閉鎖していたので、どこからやって来たのかしらと今でも不思議です。

それからずいぶん後になって今日に近くなりますが、宇治川水理実験所は旧建設省による



河川災害総合基礎実験施設の
パンフレット表紙



建設直後の河川災害総合基礎実験施設

洛南道路（現在は、国道1号線バイパス）の建設工事のため東西に二分され、平成9年の春から始まった補償工事によって新たに四つの大きな実験棟が建設されました。平成10年の秋に完成した新実験棟には、それまで屋外にあった実験施設の多くが収納され、それまでのように雑草や風雨に悩まされることなく、安心して実験に専念することができるようになりました。ここで、新



現在の宇治川オープンラボラトリー

実験棟の概要を簡単に述べますと、いずれも鉄骨造り平家建てで、床面積が第1実験棟は6,775 m²、第2実験棟は2,940 m²、第3実験棟は4,480 m²、第4実験棟は4,375 m²であり、実験棟毎に第1実験棟から青、茶、緑、こげ茶のポイントカラーが窓部分のパネルに施され、屋根部分は蒲鉾形に大きくゆるやかな円弧を描いています。また、局地異常気象観測施設の観測鉄塔やライシメータ、洪水流実験施設もそれまでの位置を変えて新たに造り替えられました。

このようにして実験所は、新しく生まれ変わった部分と、旧来の本館や管理棟などのいささかくたびれた部分とに分かれてしまいました。その中でも特に、実験所のシンボルでもあった本館は、平成7年の阪神・淡路大震災以降老朽化が急速に進み、壁の剥落や屋根の雨漏り、床の迫り上がりなど随所において建物の傷みが大変ひどくなって平成14年度末に危険建物として取り壊されました。



取壊し直前の旧本館

大正12年に火力発電所として建設されて以来、約80年の長い歳月を風雪に耐え宇治川畔に蔭の絡まるその偉容を誇ってきた本館も、ようやくその役目を終えたのです。取り壊される前には、日曜画家のおばちゃんや写真学校の学生さん、コマーシャルフィルムのプロダクションなどの写生や撮影・ロケの格好の対象としても活躍していました。宇治川水理実験所は、昭和27年3月の命名時から数えて平成14年でちょうど50周年を迎えましたが、そのよ

うな記念すべき年に本館が無くなったのも何か不思議な縁だったのかも知れません。その他、火力発電所時代に管理棟として使われ、宇治川水理実験所になってからは食堂や宿直室などに使われていた木造の建物や鉄筋コンクリート二階建ての現在の管理棟、土質力学の実験に使われていた二棟の建物、潮流の実験に使用されていた海洋河口実験施設などは、近ごろ老朽化が著しく可哀そうなほどですが、今なお宇治川水理実験所の歴史の生き証人として健在です。

新実験棟が建設されてから暫くして実験所構内に数多くの植林がされました。今でもずいぶんと大きくなりましたが、後数十年もすれば楠や白欒、金木犀などの立派な林が構内のあちらこちらに育ち、桜並木が美しく宇治川、東高瀬川の畔を飾ることでしょう。そして、実験所に働き学ぶ人々、野鳥や野ウサギ、狸や恋人達のよい憩いの場、あるいは散策コースとなるに違いありません。中書島の隠れた名所になればいいと思っています。



実験所構内の植栽（第2実験棟西側）

ここまでだらだらと駄文を繋いできましたが、いよいよ仕上げにかかります。別にまとめる必要のない文なので、言い放ちの結びです。

防災研究所に就職してから42年間、宇治川オープンラボラトリー（宇治川水理実験所）を動くことなく過ごしてきました。私は、職員組合に加入しているので、その伝手で実験所外の人々とも知り合いになれましたが、そうでなければ全く井の中の蛙でした。どちらにしても、日常はあまり実験所を離れることはなかったので、同じ防災研究所であっても未だお名前だけしか分からない人も多くおられます。そういう意味では、やはり井の中の蛙です。蛙といえば、昔、実験所の低水槽の傍で、辺りをはばかりずグアッグアッとバスで鳴いていた牛ガエルを思い出します。独り言の多い私なので、蛙の独り言とした次第です。